

京鹿子

平成二十六年八月一日発行
通巻一〇八〇号(毎月一回一日発行)



8月号

— 近 詠 —

豊田都峰

心響集 その八

石に座す青葉詩集の序章とも
一灯を奥に許して五月闇
山河晴れその真ん中に毛虫肥ゆ
ペーロンの櫂のそろひの風となる
合歡咲いてさそひ心の昨日今日
駝鳥駈く十歩につくる夏の空



何でもない午後は春ゆく日だまりに
すぐ影が生まれて春の逝くひと日
青丹なる回廊格子を透く新緑
三門を諸葉青葉に開くも偈
三門をくぐれば青葉の解脱界
噴水の四方八方なにごとなし
隠沼の高がかりして夕河骨
くわつこうのこだまがへしよ宿を得る

— 故 丸山佳子作品 —

夏蝶

故
丸山佳子



夏山にピーホイホイと鳴く鳥よ
かけてくる人夏蝶をわきたゝせ
泳ぎ子のおよぎゐるまも背丈伸ば
夢多き野に蓬々と姫紫苑
いつぬきし指の穂草よ涼しくて

秀華採集

緋牡丹や路地をうつつにしてしまふ 片山 熙子

路地は狭く、家並が詰まる。少しでも花や緑をということで表に鉢など並べ競うように植え咲かせる。そんな中、「緋牡丹」が「うつつ」、この場合は夢見ごこちの意にしてしまう。路地風景をうまくまとめている。

輪郭の三角画けば富士に雪

荒川 美邦

湖隴浮城よりのふれ太鼓

北田 せい子

前句、このように言われると形には意味が生まれるものだと納得する。形とは不思議なものである。後句は、隴のなかに湖岸の浮城を思い浮かべているのだが「ふれ太鼓」を持ちだし、眼前に城を出現させたのは手柄である。

— 近 詠 —

鈴鹿 仁

丸山佳子（浄帝院佳境遊円大姉位）追悼三句

夏野ゆく句帳とペンと愛杖と

「ありがたう」つぶやく百年そわか蝶

夏座敷灯ともすころの愁ひかな

小暑の風

あしたへと水車は稼ぐ小暑の風

万緑に太陽の塔丈伸ばす





— 近 詠 —

魚島時

和田 照海

軛ノ津の魚島時の吹流し
魚島を一網打尽鯛網漁
船板を滅法打ちにさくら鯛
鉤打ちて鱸真開きに桜鯛
妻恋の旅人の浜や桜鯛



神麓集

安 居 藤岡 紫水

花水木照り翳りして日照雨なか
含羞のこころ鏡に更衣
阿闍梨餅本家と大書安居宿
雨のまま暮るる明るさ麦の秋
晚鐘の余韻泌みゆく若葉山

走馬灯 故竹貫 示虹

死はかくも冷たき額や星月夜
香一炷迎へ火も送り火も焚かず
近いうち逢へさうな人盆の月
花火消え闇はおのれに帰るとき
走馬灯の一句残してゆきし妻

松田 都青

春の炉にすぐ熱くなる貧しき掌
不仕合せの色みな違ふ花の冷
花冷えや浅智慧のみで生きられる
完敗を惜敗と言ふ万愚節
偉らさうな人と居る夜は花冷えす

花名残 北川 孝子

花名残生きてゐるよと便り来る
逝く春のゆつくり沖を指す白帆
遠目してなぞる稜線湖五月
目瞑れば湖の呼気なり五月来る
きりもなく昭和語れり端午晴れ

瀧 丸井 巴水

読み終へし本の葉や五月鬱
寄居虫の海につながらる雲のこぶ
玉砕の日や横須賀に朧の灯
まぼろしは蝶の気配の青山河
神の血は真白し瀧の飛沫浴ぶ

花 楓 塩貝 朱千

みどりの日ワイングラスに水透かす
たこやきの洞のつぶやき夏浅し
木洩日の径に影揺る白日傘
まだ青き桑の実摘めり人を待つ
花楓揺らす風立ち再会す



京鹿子集

豊田都峰選

緋牡丹や路地をうつつにしてしまふ

京都 片山 熙子

日の差して雨滴の黄薔薇ほどけさう

緑立つ家紋瓦の葉医門

係留の高瀬舟にも桜蔭

身の内に軋む音ありかきつばた

ノクターン卒業公演大歓声

アリソナ 伊吹 之博

石楠花や宇治に一つの雲もなし

アリゾナの天向き桜開花する

輪郭の三角画けば富士に雪

城陽 荒川 美邦

風光る友待つ今の至福時

齒に衣を着せぬ娘や布団干す

花は葉に娘はドレス着て初舞台

春眠の中まで寝言及びびたり

春夕焼うす桃色に別れ告ぐ

オハイオ 水谷 直子

及第の藪うぐひすに深入りす

リラの花淡き紫ふと恩師

湖隴浮城よりのふれ太鼓

宇治 北田せい子

夏浅しより添ふむらさき花サフラン

復元の本丸御殿松の花

待ちわびし芝のみどりや夏の色

独り言思はず洩らす春灯

札幌 野村 鞆枝

蛸蚪生るるそれぞれ未来ある如し
遠近の友集ひたる桜かな

穴掘つておそろしくなる花の下
紐ひけば事つまびらか春の宵
春愁を紙飛行機にして放つ
ひなげしやまだ濡れてゐる水彩画

佐々木紗知

異国語の歎声聞こゆ桜かな

辛夷咲く茅葺の家夕餉時

酒田 藤波 松山

花見客じニールシート抑へつつ

花冷えの川にボート部水飛沫

藤の花下がる屋敷にあるじ無し

筥の届いてメニユー楽しくて

赤禪摘む手に新茶はづむ歌

桜祭武者行列に句会の日

駿河なる八十八夜の茶摘唄

背丈伸び制服似合ふ入学子

梅咲いて孫の片言大人びて

墓前には曾孫揃うて影うらら

失せ物出て来て児の顔うららかに

春浅し阿修羅の風の目におよび

人声や花の浮橋ゆれ通し

山桜皇子の杳音野を綴り

蕊の奥覗き次ぐ世も八重椿

散るといふあたりまへのこと春の海

囁りやわたしの部屋に窓がない

直江 裕子

夕暮の古巣に残る密書かな

花メール二分からはじめ散るまでも

今日介護解き放たれて花の下

花万朶無人駅とて人目魅く

増税の騒めきまとひ弥生果つ

紫雲英田の牛のひと啼き撮りにけり

長提や手話の指先囁れり

セル着たる母を想ふ日カスタード

湖を透く風はみどりよ旅鞆

歳月や桜の大樹蕊残す

月出帯食菜の花月をひとり占め

来し方を御破算にして春満月

蚕豆を焼いて塩して灘の酒

藤波の山はたそがれ雨意きざす

やはらかな邪鬼につかまれ夏に入る

風そよぐ坐禅石にも桜蕊

更衣箆笥の底の緋縮緬

渋川 東 秋茄子

さいたま 神田 惣介

千葉 伊藤 希眸

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉